

第3回佐賀市総合計画 こども・教育・福祉分科会 議事録

- ◆ 日時
令和6年7月26日（金）10:00～12:00
- ◆ 会場
ホテルマリターレ創世 佐賀 3階 グラツィアホール
- ◆ 出席委員（敬称略、五十音順） ※◎は分科会長
池田敦子、岡山香織、近藤慎也、坂井克宏、◎田口香津子、谷口仁史、細川亮、吉村純子
- ◆ 欠席委員（敬称略、五十音順）
荒木健、今村正治、吉原正博、
- ◆ 事務局
教育部長、子育て支援部長、保健福祉部長、教育総務課長、社会教育課長、子育て総務課長、保育幼稚園課長、こども家庭課長、福祉総務課長、健康づくり課長、保険年金課長 外
- ◆ 傍聴者
1名
- ◆ 議事要旨
 - 1 開会
 《説明》
 ○パブリックコメント・市民説明会の結果に関する説明（事務局）参考資料
 - 2 議事
 - (1) 全体について
 《意見交換等》
 ○分科会意見と対応方針「全体」について説明（事務局）資料1

 ○分科会長
 先ほどの説明について、ご意見、ご質問があれば伺いたい。

○委員

回答者の内訳について確認させていただいた。アンケートでは高齢者の人数が多くアンケート方法を検討していくとのことであり、期待したい。無作為に意見を聞くことは重要であるが、佐賀市が行っていることに対する声を拾うためには、広い窓口が必要に思う。

○委員

アンケートについて、いろいろな年代に加えて、回収率が 27.9%と積極的な人の意見だけになっているため、いろいろな人の意見を回収するために、回収率を上げる工夫は必要と考える。

(2) 政策「子育て・教育」について

《意見交換等》

○分科会意見と対応方針「子育て・教育」について説明（事務局）資料 1

○分科会長

先ほどの説明について、ご意見、ご質問があれば伺いたい。

○委員

子ども最優先について、佐賀市としての覚悟があるならば、学校側として同じであり、意見と対応に賛成である。

○委員

子どもの幸せを何よりも優先したい気持ちがあるため、それに向かって盛り上げていければと考える。

○分科会長

当事者である子どもの意見を聞く視点を持ってほしい。大人の意見だけでなく、子ども自身の意見を聞く、意見を代弁できる人を増やすということに配慮が必要である。各委員もそういった考えであると思っており、子どもや若い人の意見も聞いてほしい。施策に取り組むときには、そういった点についても取り組んでほしい。

○委員

35 ページと 36 ページについて質問させていただいたが、36 ページ 2-①「最新技術等を活用しながら、児童生徒同士が学びあい～」について、それは 35 ページ

ジではどこに反映されているか。

○事務局

35 ページの 3 つの主なポイントについて、一番左の「こどもたちが、自ら考え、行動し、生きる力を身につけること」が 36 ページの 2-①、「誰一人、こどもたちを取り残さないこと」が 36 ページの 2-②、「こどもたちがいつまでも楽しく学べる環境があること」が 36 ページの 2-③・④とリンクしている。

○委員

では、こども目線というイメージでよいか。36 ページでは、学校現場での改善をしっかりと行うというイメージであるが、35 ページでは主語がこどもたちと異なり、違和感があった。

○事務局

35 ページでこどもたちがこのように育つために、36 ページでこのようなことに取り組む、という関係になっている。

○委員

④では施設が初めに来ているので人的環境が感じられないと思ったが、文言として取り上げにくいものであり、福祉まで含めて考えていると思うので、これで結構である。施設を環境に変えるということも考えたが、逆にぼやけるのではないかと思った。佐賀市のフリー参観の感想で「立ち歩いているこどもがいる、こういうこどもはどうか」という意見がたくさんあり、立ち歩いているこどもはそこに指導性があるかどうかであり、学校側のアピールが足りない部分もあるが、まだまだ一般的な捉えが不十分であり、人的環境は重要と考えている。

○分科会長

教育を支える人材の確保・育成について意見をいただいていたため、計画の中にしっかり反映いただきたい。

○委員

まだ多様性の理解が足りていない。発達障がいなどのこどもたちが困っていて、その現実がまだ一般の方に浸透していない。ここ 10 年で特に保護者は大分変わってきたが、社会一般としてはまだまだ足りない部分がある。それによって保護者や教員が大変なところがあり、いろいろと問題が起きているため、まだ心配な部分がある。

○委員

学校現場の話聞くに、まだまだ人手が足りていない。廊下を立ち歩く生徒の世話を専門員やいじめなどに対応する体制が必要だと思う。学校にはすでに多くの人が関わっているが、それらにマンパワーが必要だと思う。それが見られないのではないか。

○委員

「ユニバーサルデザインに配慮した～」のあとに、多様性という言葉で「多様性の尊重できる学習環境を整える」などといった言葉で入れてはどうかと感じた。

○事務局

今回、36 ページの2の②で「多様な教育のニーズに対応し」と修正している。元々④はハード整備の話を中心にしていたが、意見を踏まえてハード面以外の「多様性」の要素も加えている。

また、人材不足については②に含めており、「人材不足のため、地域や民間などの人材を活用しながら」といった意味合いを含んでいる。

○「子育て・教育」パブリックコメント意見と対応方針について説明（事務局）

資料2

○委員

児童数の減少に対する再編においては、やはり保護者や地域の声を聴きながらでないと、一概に児童数を増やすだけではいけない。児童数が少なくとも特色ある教育につながっており、市の対応方針でよいと考える。

(3) 政策「健康・福祉」について

《意見交換等》

○分科会意見と対応方針「健康・福祉」について説明（事務局） **資料1**

○委員

No28 では、訪問医療の体制ができているという説明でよいか。

○事務局

医療体制全体として、子ども診療所や医師会・医療機関等との連携など、整備さ

れており、今後も訪問医療体制を含めて、整備に努めていく。

○委員

また、特定検診勧奨について、はがき以外にどのような方法があるかと考えると、ある市では広報車で周ったりしている。はがきだけでは見る・見ないや対応しないなどあるので、受診率を上げるために、他にはどのような方法が考えられるか。

○事務局

いろいろな広報を行っているが、1対1の方法については残していきたい。例えばメールでは、登録した人にしか届かないため、医師の先生方などと協力して、地道に対応を続けたい。しかし、受診率は人口が多いとどうしても低くなりやすい。いろいろな広報のやり方を考えるとともに、特定検診後の保健指導・訪問診療などへ進む流れを作れればと考えている。

○委員

意見した箇所も今後改善いただけるとのことで、期待したい。

38 ページの2-⑤「安心して医療を受けることができる体制を整える」は、二つ目の「日ごろから取り組む健康づくりの推進」に入っているが、医療の体制づくりとして、一つ目に入るのではないか。

また、私は先日コロナで病院を受診したが、いくつかの病院でかかりつけ医ではないとして断られ、たらいまわしにされて診察が翌日になってしまった。健康で病院に係る機会がなく、かかりつけ医がいなかったため起きたことだが、安心して医療を受けることができるに違和感があるため、何か対応を考えていただければと思う。

○事務局

構成としては、施策1を福祉、施策2を医療・健康と位置付けている。医療体制については、休日夜間や子ども診療所に加えて、山間部医療や過疎化対策などの中で、きちんと医療を受けられることを継続したいと目指している。

また、かかりつけ医がない場合のコロナ対応の経験については、事例として参考にさせていただきたい。

○委員

前回、権利を守ることについて意見させていただいた。子ども・教育・健康福祉においても「権利を守る」「権利を擁護する」という言葉がないといけないと考えている。修正案では、「生活や財産などの権利を擁護する」との文言が追加さ

れ、対応されてよかったと考えている。

○委員

健康福祉において、担い手のすそ野を広げるという点について、地域福祉活動計画のアンケートで「市民活動に参加する人の割合が実は減っていること」が課題として挙がっていた。これを逆転しないと 2040 年は乗り切れないと考えているため、盛り込んでいただいていたよかったです。

また、全体として基本計画の中で、前向きな「希望」というキーワードがあればよいと思う。時代の変化などから守るというイメージが強いが、多様な参画の機会が保障され、将来や希望をみんなで作っていくような前向きなメッセージが一言でも入るとよりよいのではないかと考える。

○委員

前提として資源には限りがあり、どのように分配するかは難しいところがある。例えば、福祉でも点字ブロックを全て敷き詰めることはできず、その必要もないと思うが、人が少しでも余裕をもって一人でも手伝ってもらえれば、移動も案内も何でもできる。理念的な話になるが、「人的環境」は、これから人が減るからこそ、大事な資源になると感じている。自分自身の経験を踏まえて、全てをやらうとする必要はないが、それぞれ何ができるのかが大事である。役所としても、全て引き受けるのではなく、「これはできない」と言って、助けてもらおうとすることも大事ではないか。そういった視点も大事だと考える。

(4) その他について

○分科会長

審議としてはこれまでとしたい。

以降、せつかくの機会であるため、各委員の方より、一人ずつ自由に意見をいただきたい。

○委員

総合計画の策定に委員として参加させていただき、佐賀市の将来をどう考えるかに参画できたことは、自分自身の勉強にもなった。今、子ども支援の中で、「子どもアドボカシー」といって当事者の声を聴くことが大切になっている。障がいや認知症などがあつたり、理解力が低くとも、対象者の声を聴くアドボカシーや意思決定支援は重要である。子どもだからこうだろう、障がい者だからこうだろうなどとせず、その人の声に耳を傾けることが大事だと、現場を通じて感じた。

今回の計画策定では当事者の声を聴くという機会はなかったが、当然全ての要望に応えることはできないものの、今後配慮して行ってほしい。そういった姿勢を身に着けることができれば、良い佐賀市になると感じた。

○委員

このような場に参加するのは初めてで、異なる分野の意見を聞いてためになった。私は民生委員を長くやっており、高齢者の方と接する機会が多く、いろいろな相談を受けている。また、ラジオ体操など健康づくりにも関わり、高齢者を現場に出てもらえるよう取り組んでいる。最近感じるのは、障がい者に関して、私も年を取って難聴となり、外からは見えないが、補聴器を付けている。障がい者という項目もあるが、外からはわからないような障がいへの支援については足りない部分もあると思うので、支援に取り組んでいきたい。健康について、私は病院のお世話になることは少ないが、毎年健診だけは受けている。高齢者には検診に行かない人も多いので、佐賀市には特定検診や訪問医療の充実を特に推進してほしい。

○委員

委員会に参加させていただき勉強になった。私たちは相談対応を行っているが、その中で孤立ということの課題を特に感じている。少子化にもかかわらず、虐待やDVの相談件数は過去最多と相談ニーズが高まっているが、実際に措置を受ける子どもたちは5%程度に過ぎない。それ以外の家庭領域の問題解決を支援するために、アウトリーチや家族支援が必要になっている。

また、学校では、不登校生徒数は過去最多の中、佐賀市では支援を受けている人の割合が高く、支援は充実していると思うがまだ不足している。コロナ禍では、少子化の中で若年無業者が増加し、過去最多となっており、売り手市場といわれるものの、就職氷河期の方よりも10代の方が厳しい状況にあるとされている。不登校児童生徒数の増加は、就職の問題にもつながるため、学校教育の段階から不登校対策を抜本的に見直していくことが必要である。それぞれの施策で人手が足りないことは事実であるが、各施策間で連携して、統合的に運用できるような仕組みも議論されていくようになる。「誰一人取り残さない」という文言があるが、全ての子どもたちに支援が届き、自立するまで伴走して見守っていければと思う。社会福祉協議会など、いろいろな現場を担っている方と分野横断的に連携し、どのように制度を変更すれば課題解決につながるかを議論できるワーキングチームがあったらいいと思う。

自分もこの計画策定の議論に参加したからには、今後も佐賀市に住み続けてこの計画がきちんと実行されるよう、責任を持っておきたいと感じた。

○委員

子育てを通じて、何に怒るのか・どんな行動をするのかなど、自分を知ることができたと思う。それがすごく面白く、その延長として、意見の違いや相手の気持ちを考えるようになったと思っている。

もう一つは、足りないぐらいがちょうどいい。自分自身足りないことが多くて落ち込むこともあったが、落ち込んでいるときはまだ頑張ればやれると思ってやっていた。これは自分ではできないとなった時に家族や周りの人に助けをもらうように、気持ちの面でなっていた。

これまでの保育や子育てサロンなどの経験を通じ、子どもに加えて親子という関係は本当に面白いと感じて、だからこそ続けて来れたと思う。佐賀市と一緒に取り組んできたが、やりたいようにやるのではなく、ルールを設けた上で付き合っていくことが重要であり、「大変だけど面白い」となってもらえればと思う。

最後に、佐賀市の方も計画策定に努力して、本気で「こども最優先」と言っていた。子どもの学びを通して自分たちもいろいろと学べる、ずっと成長していけるとよいと感じた。

○委員

私は障がいがあり、一人で生きていないので、多くの人の意見や何を考えているかが聞けるこの時間が一番充実している。障がいを持ち、今まで出来ていたことが出来なくなった時に落ち込んだ。目を治したい、でも治らなかった、ダメなのか、その二元論に捕らわれず、目が見える・見えないに関わらず、面白く生きたいと感じた。問題に意識を向けるよりも、問題としてみている視点こそが問題であることもありうる。

まだまだ、障がい者や福祉に関わって年数が浅いが、多くの方が関わって回っていることを感じ、今回は総合計画策定に関わられてよかった。

痛みがあった時に、それを取り除こうとすることも優しいことであるが、それがあからしてどう自分や社会と向き合うかも重要である。だからなんでも全て先回りして取り除く必要はないのではないかと。「どんな支援をすべきか」と聞かれることがあるが、私は「放っておいてください」と答える。これはなんでも手伝ってもらうのではなく、私は適度に失敗や怪我をして、その痛みが教えてくれることもあるため、経験してありがたいと思っている。例えば、目が見えなくなって妻の笑顔が見えなくなってとても悲しかったが、それだけ大切な人がいることを知ることができた。

今回、総合計画策定委員会においても、課題解決は重要であるが、市民がそれぞれの役割を全うしていくことが重要だと思う。うまくいかないことに目を向けることもよいが、希望がなくてはどうしようもない。私も目が見えないが、だから

とって意外と不幸ではないよということも伝えたいと思っている。本日は、皆さんの話を聞けて、ありがたいと思っている。

○委員

分科会に参加させていただき、有意義な時間を過ごすことが出来ありがたい。私は、結婚し、専業主婦として子育てをして、読み聞かせなどいろいろな活動に参加して、今はフルタイムで働いている。私はハローワークの相談員として仕事を始め、キャリアコンサルタントの資格を取って働き、今まで 6 千件の相談に対応してきた。相談内容は、下は中学を卒業したばかりから、上は 70 近い方まで多岐にわたっており、非正規として自分の契約についても悩んだ経験があるが、今は非正規雇用の方が多いと感じた。

特に女性では、最近は働きに出ている母親の方が増え、働くにあたって置き去りにされている子どもが多い。子ども会や子ども食堂に関わるにあたり、親が忙しくて役員ができず、親の都合で子ども会にも入れないような子どもも増えている。今夏休みで毎朝公園でラジオ体操をしているが、ここでやっているなんて知らなかったといわれた。子ども会でも 80 名中十数名しか入っていないこともあり、イベント情報が届いていない状況にある。加えて、教育現場でも先生たちは業務で手いっぱい、いじめ問題など先生たちだけでは解決できないところもあり、教育現場を改善していけるようにと思っている。

今回は参加して勉強になり、感謝している。

○委員

私は教員としてどんな子どもを育てたいかという、自分の力で精いっぱい頑張り、自分だけで出来ないときに周りの人の力を上手に使えるようになってほしいと思っている。学校も同じで、学校にも出来ないことがあり、それを地域やいろいろなところに助けを求めて、子どもたちのために取り組んでいきたい。先ほど意見があったが、市役所も出来ないことはあり、連携してやっていかなければならない。

今の教育現場では子どもたちを引き上げること、これからの社会を生き抜くための資質能力を持たせることに偏りすぎていると感じる。学校はそれだけではなくゆとりや癒しの働きがあり、子どもは自分たちで伸びていく力があるのに、急いでしまっている。文科省の方針でこうしなければいけないというのがあるが、癒しやゆとりが無くなっているのではないか。子どもたちが本来伸びていく力を保障するためには、「ゆとり」がキーワードではないかと思うので、佐賀市も含めて大事にしなければならない。

子どもたちはどの子もかわいい。「こどもの幸せを何よりも優先するまち」はあ

りがたい言葉であり、これからの社会を担う子どものために、学校としても協力して頑張っていきたいと感じた。

最後に、いろいろな視点からの意見を聞きすぐく学びとなり、子どもたちの前に立つにあたり、より広い視点を持っていきたいと思った。

○分科会長

今回、行政側の参加者の方にも厳しいスケジュールの中で、精一杯対応していただき本当にありがたいと感じた。

これから先、市として完璧を目指すのは難しく、神崎市や小城市と連携して助け合って、緩やかなつながりがあるといいと感じた。佐賀市だけで完璧に行うのはもう無理であり、自治体同士でサポートしていくことも大事だと思っている。

これから協力が重要な中、この分科会は、いろいろな人が集まり、協力して出来たということで、これからは希望を持っている。

以上で、意見交換を終わりとしたい。

3 閉会

○事務局

次回の会議は、全体会となり、8月8日（木）の10時から、ホテルグランデはがくれでの開催を予定している。